

## 諏訪地方における工業の変遷と現状について

原 紅実子

長野県諏訪地方は、山地に囲まれた冷涼な盆地であるが、甲州街道・中山道の交点に位置し、その交通条件の良さと、農業の零細さが、副業をさかんにし、かなり早い時期から商品経済が発達していた。製糸業の導入は、県内では遅い方であったが、明治初期にいち早く器械式をとり入れ、問屋制家内工業から工場制へと発展した。それが低賃金の若年女子労働力によって支えられ、明治中頃から昭和初期には、日本を代表する生糸生産地となった。

しかし、世界恐慌による糸価の暴落や、重工業化に押され、昭和5年をピークに衰退の道を辿り始める。

第2次大戦中は軍需工業に重きがおかれ、製糸業には大打撃であった。だが、東京方面から光学兵器などの工場が疎開してきて、製糸工場の建物や、半失業状態だった労働力を利用して操業を始め、その中で戦後も当地に残った企業が、元来の製造品であった精密機器を再び製造するようになって、諏訪の工業の発達の大きなもとになった。疎開工場の一つであった第二精工舎は、諏訪精工舎と改称して当地に本社を構え、協力工場を次々と設立し、製品も時計から技術を応用してプリンタ、半導体などを手がけるようになった。現在はセイコーエプソングループとして、各協力工場を合併し、松本・塩尻から富士見にまたがって諏訪地方に君臨している。

また、疎開企業・工場とは別に、製糸器械の修理や製造から派生的にバルブなどの機械工業が育ち、さらにそこから戦後間もない頃にカメラやオルゴールのメーカーが設立されたのも見逃せない。小さな工場も同様にして増え、それらは大きな

メーカーの下請け、あるいは中規模の部品メーカーのまた下請け、というかたちで、下請構造を構成していった。9人以下の小規模な工場が全体の7割以上を占めることから、それらの役割の大きさがわかる。

精密機械は、現在でも諏訪地方の工業において主流であることに変わりはないが、セイコーの例のように、電子機器関連の製造も行われるようになり、特に茅野市、富士見町には、新しく工場がふえた。これは、諏訪湖の周囲の岡谷市、下諏訪町、諏訪市に工場用地の余裕がなく、地価も高すぎて広い用地を得られないことにも原因があり、それが塩尻方面や茅野方面に押し出すような形で工場を立地させている。

レイバー・コストの点でも、諏訪の有利性はもはやなくなった。円高の影響もからんで、大きなメーカーは海外に工場を進出させ、小規模なメーカーでは人件費に悩んでいる。一方、工場のFA化(生産システムの自動化)も進められ、労働力に関しては量より質を求める傾向にある。

以上のように、新しい技術や製品の開発を中心に、いろいろな面で変化がおこっている。その中で、県と地元が協同で構想を進めている「テクノレイクサイド計画」も、ハイテク産業や研究開発施設のある、産・学・住が一体となった地域の興隆を、という目的を持ち、今後の進展が期待される。また、交通条件の点でも、中央道西宮線が昭和58年に開通していっそう便利になっており、これから長野線が開通すると北にも通り抜けられるようになる。新しい工場や施設の誘致への影響、諏訪湖周辺以外への広がりなどが、注目されるところである。